東上の文樂

河竹繁俊

第二卷　第九號

まづは此の十月一日で、二十日間の東上文樂興行は、大入り滿員つづきの中に、とどこほりなく終了した。山城少掾がはじめの一日二日、風氣だつたのを、ひとごとならず心配してゐたところ、ずんずん恢復したが、終りの兩三日は音聲をいためをりまして――と口上でことわつた。何しろ毎日二段づつといふ破天荒な事業をなしとげたことは、特筆するに足るであらう。「一日二段語りの健闘は悲壯である」とまで、「東京新聞」の安藤鶴夫氏も感歎してゐる。

こんどの文樂の好成績には、いろいろの好條件が、かさなつてゐた。昨年の暮、東京都教育局の都民劇場が招くつもりで、新聞紙上の話題になつたこと。去る三月末、藝術院會員に推薦された古靱太夫が、秩父宮家から山城少掾なる掾位を受領して新聞紙上やニュース映畫の上で宣傳されたこと。それに最近、文樂座への行幸があり、天覽の光榮に浴したこと、等々。おまけに終戰後はじめて、四年ぶりのお目見得といふのでだだツぴろい東京劇場も毎日の滿員。大阪では、とかく入りがかんばしくないのに、ぎつしりとつめかけるので、座の關係がよろこんでゐるとあつては、樂屋の宿舍を忍び、この生活のしにくい時に來演した甲斐があつたといふものだ。

だが、樂屋をホテルにあてたことは、またモツケの幸ひにもなつた。三日目に山城に逢つた時、「ここを宿にしてゐたので、

風氣にもよし、助かりました」といつてゐた。關東に未曾有の大水害をおこさせた十五日の豪雨にも、皆々雨にぬれずにすんだ。――その當夜はあらしのために停電となつたので、ロウソクのあかりで「新口村」と「吉野山」とを演じて、何か古風な感じを與えたといふ。その晩、打ち出してから、暴風のために交通機關が故障續出で、觀客は劇場内に籠城し、有志のめんめんが舞臺へ立つて聲帶模寫をやつたり、樂屋の諸君、綱造君までがとび出して、餘技でワツと言はせたりした。こんなことも御報告しておきたい。

九月十二、十三の兩日は、前記した都民劇場の研究鑑賞會といふことだつた。

そのために、はるばる京都から出馬した三宅周太郎氏が文樂藝術について講演し、綱太夫は義太夫淨瑠璃の語り口について紋十郎は人形の構造、つかひ方について、說明した。三宅氏は文樂の藝術は、ジミチに掘りさげ、ねりあげられたもので、うどんかそば、そばのかけ、のようなものだといふたと之を述べて、この古典藝術を長く、熱情を以て支持してほしいと希望した。綱太夫紋十郎兩氏の解說は、もう幾十度の試練を經て堂に入つたもの。「舞臺百回」といふ言葉を聞いたのが耳にのこつた。

いつたい、綱太夫、彌七、紋十郎の三君は、機會のある毎に、よろこんで各所の座談會や講演會、研究會に出かけて行つて文樂藝術について解明する、あの態度はじつに有りがたいことだと思ふ。文樂普及にたいして、文樂としても慰勞感謝の言葉をおくるべきだと思ふ。

さて、三の替りまで出した文樂の演目、一々は振りかへつて見ないとしても、櫓下たる山城少掾の健闘には、まつたく恐れ入つた。新口村に重の井子別れ、二の替りに合邦と寺子屋、三の替りに堀川と引窓といふ、堂々たる出し物を、毎日二段づつ二十日間語りぬいたのだからえらいものだ。綱太夫は酒屋に二十四孝に壺坂の後半、大隅が熊谷に沼津、壺坂の前半といふ有樣だから、古稀に達した山城の元氣、精進ぶりが想像されるであらう。

山城の語り物、いづれも上出來の中にも「寺子屋」がやはりよかつたといふのが世評だつた。ことに松王の年齡をあまりふけさせないといふ考案が、今回はじめて施されたことが注目された。しかし、私としては、この大きな劇場で山城に語らせるのは、止むを得ず、線を太くさせたように思ふ。去る三月受領のために東上したとき、某料亭の大廣間での寺子屋のような纖細味には缺けてゐた。だが、いかにも老熟した三昧境にはいつた藝術たることを感じさせる。何といふ行きとどいた淨瑠璃なのだらう。何といふ精神のやどつた表現なのであらう。至妙至藝といふことは文樂座中この人だけにはゆるされていいような氣がする。絶えざる研究、工夫、努力には敬服のほかはない。

山城少掾受領の披露の式も、攝津大掾の時にならつたのであらうが、サツパリとして嚴肅だつた。堂々たる常陸山にも似た巨軀、りつぱな風貌、えぼし素袍も身について、まづはよろし。

わたしは音樂のことにくらいが、大隅の評判はよかつたりわるかつたり、どうもわるいほうが多いそうで氣の毒。美聲の伊達太夫が、少しおちついてきたことと、越名、松、濱といつた若手が、懸命になつてゐることとは注目されてゐる。

三味線にも、道八、仙糸の老巧を失なつたにしても、少掾の相三味線清六は、二十五年の提携とあつて銀婚式。わるからうはずがない。三味線陣は太夫陣にもまして比較的充實してゐるといふ評判だつたが、清八、廣助、綱造、重造、喜左衞門その他山城の努力にまけないように、もつともつと勉强してほしい。

人形陣に榮三を失なつたことは、じつに淋しく、ポツカリと大穴のあいた氣持だが、七十九翁文五郎が、なかなかシヤンとしてゐるのはたのもしい。梅川、重の井、玉手、千代、お俊、お早の六役、まことに山城とならんで文樂の双へきながら、彼はあくまでも觀照的、精神的、內容的にと、ほりさげる語り方、これは巧緻な技術、いかにもあざやかできれいで水際だつたつかひ方、好對照にはちがひない。

「合邦」で「母はいじばる娘の手、引立て〳〵むりやりに納戸へこそは——」で、母親が玉手御前のいやがるのを無理やりに納戸へ連れて行く、柱へつかまつて行くまいとする、ああした形の見事さ。だが手負ひになつてからの、あらあらしさは、型なのかもしれないがどうかと思ふ。

門造老が平作、彌陀六に枯淡な藝を見せ、玉助、紋十郎といふ、榮三文五郎の後繼者もおちついてきた。ことに紋十郎は相模、忠三女房、八重垣姫、およね、政岡、お里、朝顏、といふ、例の通りの活躍。寺子屋の源藏までもつとめたが、これは多少仕勝手の悪そうに見えたものの、內輪な動きで評判はわるくなかつた。龜松も文五郎系の行き方で、人形はよく動く、あれで見物席をじろじろ見まはすようなことがなければ、なほいい。光造、榮三郎、紋司等も三年たつただけのことはある。

けれども、三業の中では人形陣が見劣りがしたといふのが、くろうと筋での概評だつた。「東京新聞」の安藤氏は、「最も藝質が落ちてゐるのをおほふべくもなかつた」といい、「ステージ・スクリーン」紙上で宮崎氏も「太夫、三味線、人形の三業中最もそろつてゐるのが三味線で、次ぎに太夫、ぐんと離れて人形といふ順になる」と言つてゐる。大いに參考にしてほしい言葉だ。

技倆が十分でないのに、人形よりも遣ひ手のほうが、どうも前へシヤシヤリ出るような氣勢の見えるのは困る。それには出遣ひの濫用といふことが、どうも問題になる。

今更でもないが、東京で六七年も前に問題になつたこともある。地元の大阪ではどうか知らないが、東京引越し興行の時でも、二十年ほど前までは、中幕とか景事だけで、一番目二番目などは、出遣ひではなかつた場合が多い。なぜと聞いて見ると（違つてゐるかも知れないが）、東京松竹の方針で、賑やかにもなり、人形遣ひ諸君の切符受持が多くもなり、また出遣ひには手當も出るとある。いまでは、一日中を通してほとんど全部が出遣ひといふことになつてしまつた。こんど聞くと、文樂座での少掾披露の時の「熊谷陣屋」は、出遣ひでなく黑だつたといふ、これは山城の注文だつたといふ。故越路太夫も出遣ひを好まなかつたとある。それは淨瑠璃を本位とする場合、出遣ひは鑑賞の焦點を散漫にするおそれがあるからだ。文樂人形初見の若き人々に取つては、出遣ひの人形つかひの、人形に比較して大きな顏がうるさくて、見慣れるまではゴチャゴチャになつて困つたといふ。これも道理である。こうして、出遣ひが常識となると、兵次の名口上「人形出づかひにて相勤めます」だけは言ふ必要のないものになつてしまふし、人形遣ひの諸優が今に薄化粧どころか、厚化粧もしないと限らず、けんらんたる肩衣を着るようにもなるであらう。

かつて榮三老に親しくきいたことがあつた。「明治前後には、もつと美々しい肩衣をつけて、遣ひ手が化粧をしたといふことですがほんとうでしようか」と。「あつたといふことは聞いておりますが、わたしたちはよく存じません」といふ返事だつた。「文五郎藝談」にもそのこともあり、氣にしてゐたが、初代の吉田文三郎が化粧して出遣ひをして、識者が眉をひそめたといふことが分かつた。だから、寶暦前、二百年前からのことなのだ。文三郎も自負心が強く、表面にシャシャリ出て座元を狙つた野心家だつたが、とかく、妙に前のはうへ出てくると、藝術的にはいろいろな危險が生じる。どうしても出遣ひは、文樂將來のためにも再考さるべき問題だ。これには待遇についての配慮とか、頭巾をかぶるために替玉などを出すような不心得のないように、など、お互ひにいましめて、どうか藝術的にすぐれたものにしたい。

「一番質の落ちたのは客で山城にチョボチョボと聲をかけたのにはおどろかされた」と宮崎氏が指摘してゐる。これは事實だ。こんどの東上が大入り滿員で、文樂の諸君は氣をよくしたであらうが、それで安易な心持が少しでも出たらたいへんだ。「――文樂も一度は見ておくものだわねえ――」といふのが、六七十パーセントまでの觀客の心持だとすると心細い。以前のように、來年以後になつて、年二回づつ東上したらどういふ成績になるだらうか。豫測は困難である。

都民劇場の會員有志が、三宅周太郎氏に、綱太夫、紋十郎の兩氏をまじへての座談會を開いた時に、來會者三十名のうち、二十五名までが文樂初見といふ人たちだつた。そうして、太夫の語る淨瑠璃の文句はほとんど分からない。だが人形の美しい巧妙な動きに眺めいつたといふのが、いつはらざるところだつた。これは若い學生諸君が多かつたから當然でもあるが、綱太

夫には痛かつた。綱太夫もそれが近來の傾向であり、また大阪でさへチョボチョボと聲のかかつたこともあるといつた。そこで、少しでもよく分かつてもらほうとして語り口をかへようとすると、今までの語り方ではいけなくなつてくる。つまり、時代觀客、民衆に對應しようとすると、これまでの語り方ではいけなくなる。どうすればよいのか、そこに大きななやみがあるとインテリ綱太夫もありのままに述べた。それにたいしては、もつと新作を取り上げたらとの說も出たが、それはしばらく措くとして、傳統を守りぬいてほしいといふことに決着した。

それにたいして綱太夫は言つた。それでいいとなつてくれれば、そんなありがたいことはありません、つまり今までの道をひたむきに精進すればよいのだから、といふことだつた。——新作はもう度々實驗ずみで、決してうまく行きそうもないといふ意見だつた。——ところが、これには必ずや經營上の困難が附隨してくるわけで、興行的、維持の面からすれば、いぜんとしてなやみがつきまとふわけなのである。

しかし、此のなやみは文樂ばかり、綱太夫ばかりの問題ではない。能樂、歌舞伎等から邦樂ぜんたいに關する共通のなやみなのである。十分に史的檢討をも加へて、善處して、古典藝能、傳統藝術を擁護するの方策をたつべきで、そこに國立劇場の問題、松浦氏の言ふ國劇院などの問題もつながりをもつわけなのだ。しかし、これは別の大きな課題にもなり、むづかしいことだから、今はふれない。が、とにかく、これら古典藝能と新世代、民衆との關連については、こんどの文樂東上によつて、さらに新らしく、また深刻ならしめたことはあらそへない。

だが、終りに言ふ。

文樂がこんにちまで、——大正年代以後の四十年間、人形淨璃瑠芝居の常設劇場としては、たつた一つの存在であつて、ここまで擁護されてきたことは、文樂諸君の努力もさることながら、松竹が犧牲をもかへりみず、愛護し、維持しつづけた功績についても、また十分に認め感謝しなければならないと思ふ。どうか此の上とも、京阪の方々が松竹と心を合せて、熱情を以てこの國寶的藝術を擁護していただきたい。

折も折、故鴻池幸武氏の遺言書なるものが發表されそれが唯一事、文樂への激勵と存續祈念にあつたことが報せられた。この遺書は貴い。層一層の努力と愛護とを、われわれも切にこひねがふ次第である。(十月一日)(早大教授・文博)

笹屋

むすめかしらですが名稱は笹屋と呼ばれてゐます。之はお染の扮裝